

地殻変動(震源変異)が見える！

FM放送の直接波観測網(他で)

発見！ 潮汐の干満とFM電磁気PulseのUpDownが**同期！**

FM電磁波の異常と、潮汐変化の「**関係**」が見つかりました！！
(FM直接波の電界異常と、潮汐の干満変化)を、照合し検証をしたら「ほぼ**<同期>**」している事が判りました。(下記資料をどうぞ)
潮汐の大きい荷重変化によって、地殻に異常変動が起これば軋轢
& 摩擦等で電磁気が発生します。これが地表迄電磁誘導等で伝わる
と地表電磁界が変動する為、電磁波伝搬にも異常変化が現れます。

(JYAN研究会)地震予知アマチュアネット
会長 國廣秀光

なぜ電波観測で判る？

- 1 光が、水槽の水に斜めに入ると、屈折します。電磁波も、「光と同じ性質」があります。(電波ミラージュと同じです。)
- 2 地表には、水槽の水と同様に、電気や磁気の界層があります。(この電磁界中をFM放送の電磁波が横切っている。)
- 3 この電磁界層に、震源域で発生した電磁気が伝わると、地表電磁界は、伝導した電磁気で加減されるのです。
- 4 電磁界層が、伝導した電磁気で変化をすると、通過中の電磁波に揺らぎ(屈折や電磁引力と斥力等)が発生します。
- 5 この揺らぎで(FM電磁波の進行方向や電界強度が変化する)ため、電波観測で地殻変動等が察知できるのです。

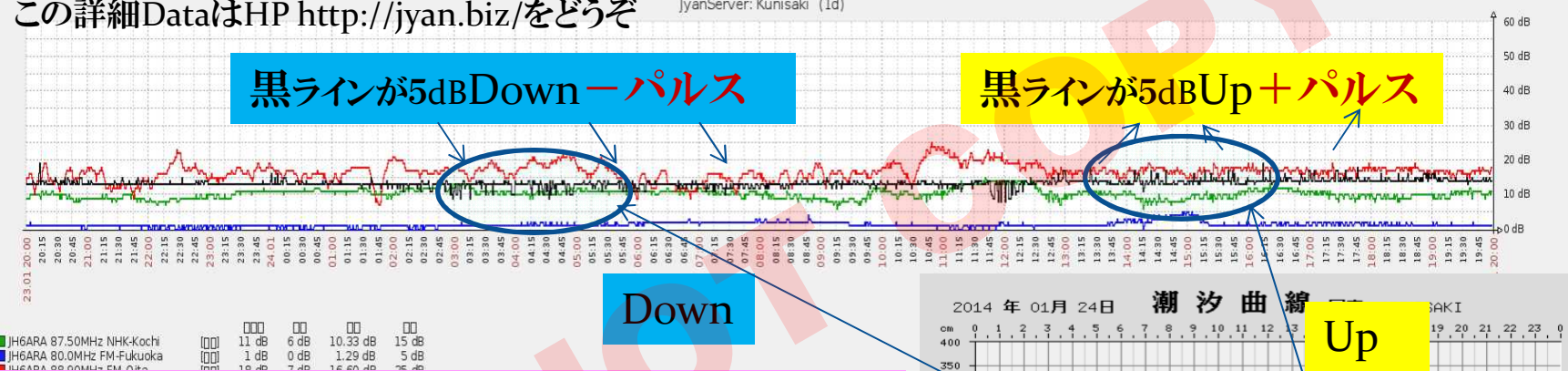
電磁波の揺らぎDataとメカニズム

1 地表電磁界を実測した観測記録(GraphのUpDownとPulse)

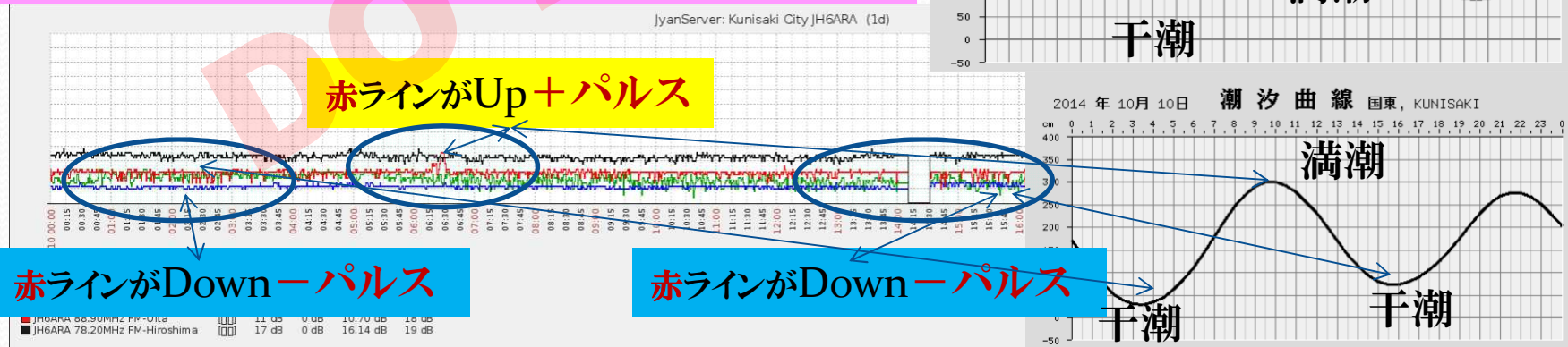
UpDownやPulseの上下方向は、電界的な+と-方向の揺らぎ変化が現れていることから、軌轢の圧縮と伸張は逆断層と正断層等々で発生した現象と考えている。

この詳細DataはHP <http://jyan.biz/>をどうぞ

JyanServer: Kunisaki (1d)



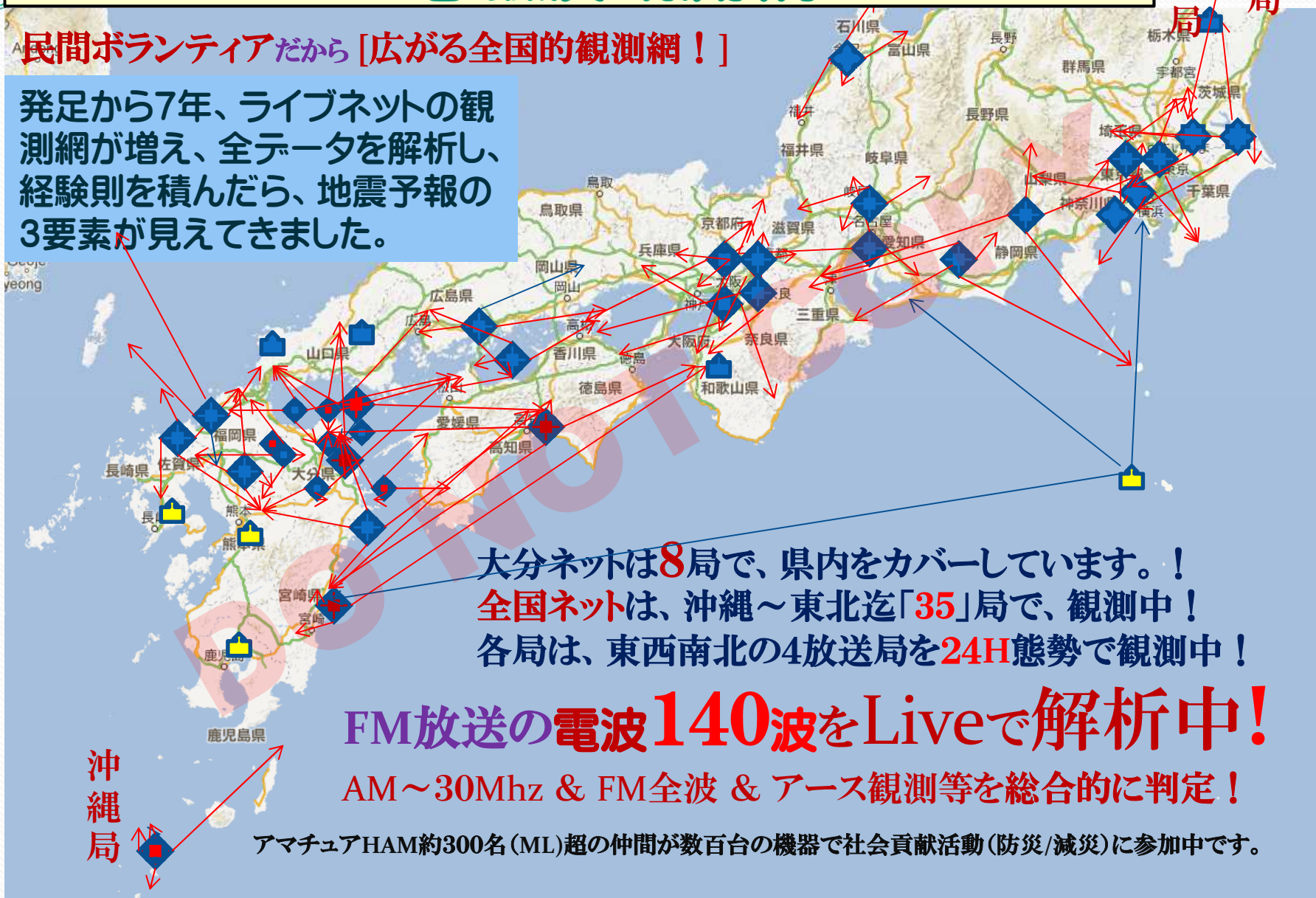
黒ラインと潮汐ラインのUpDownが同期している。
(この同期現象は、年間を通じて現れている。)



JYAN研究会 電磁波観測網 (2015年4月)

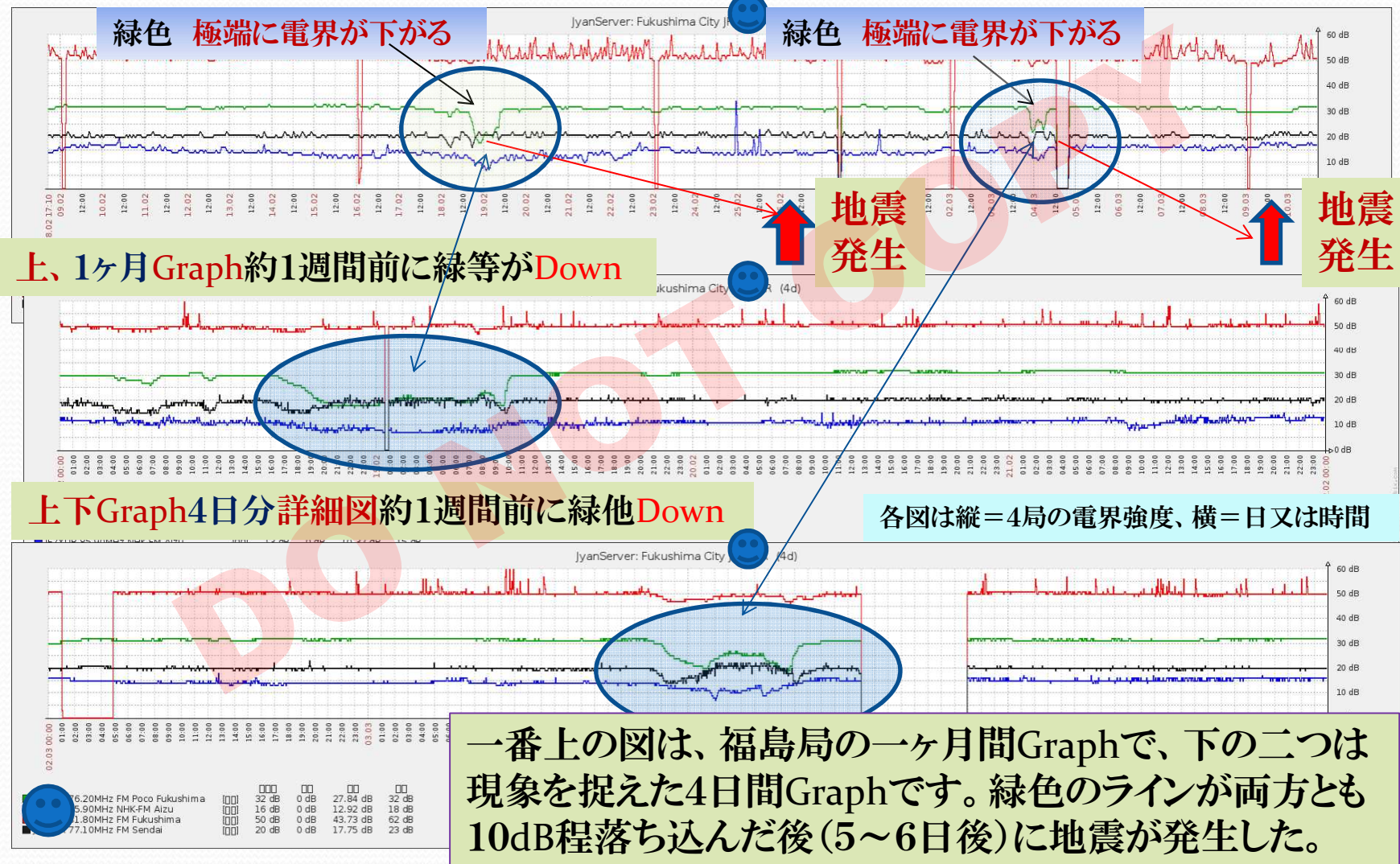
民間ボランティアだから [広がる全国的観測網！]

発足から7年、ライブネットの観測網が増え、全データを解析し、経験則を積んだら、地震予報の3要素が見えてきました。



(一目瞭然！)福島県沖地震の前兆揺らぎ記録

福島局の記録(2015-2-26と2015-3-9) 約1週間後に震度4と震度3の地震発生



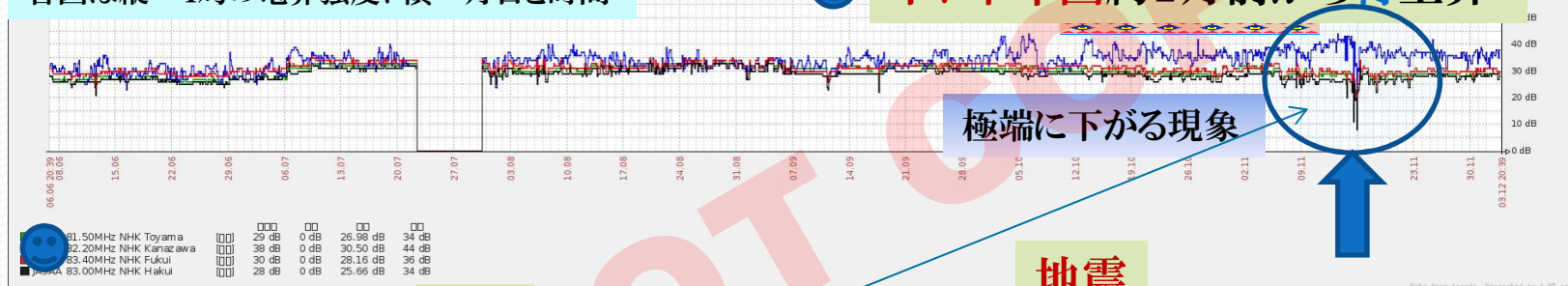
長野地震の前兆揺らぎ記録(昨年11月22日)

長野県の隣、金沢市での記録です。11/15～16日2日間
激しいDOWNがあり、6日後に長野で震度5+の地震があった。

各図は縦=4局の電界強度、横=月日と時間

JyanServer: Kanazawa City

下、半年図約1月前から青上昇



観測局が全国的に広がってきたので、各地の地震で前兆記録が増えている。特に、震度5以上では、約1週間前に明確な前兆が捉えられる事が多くなった。

(理論) 地表面と上層の電磁界強度

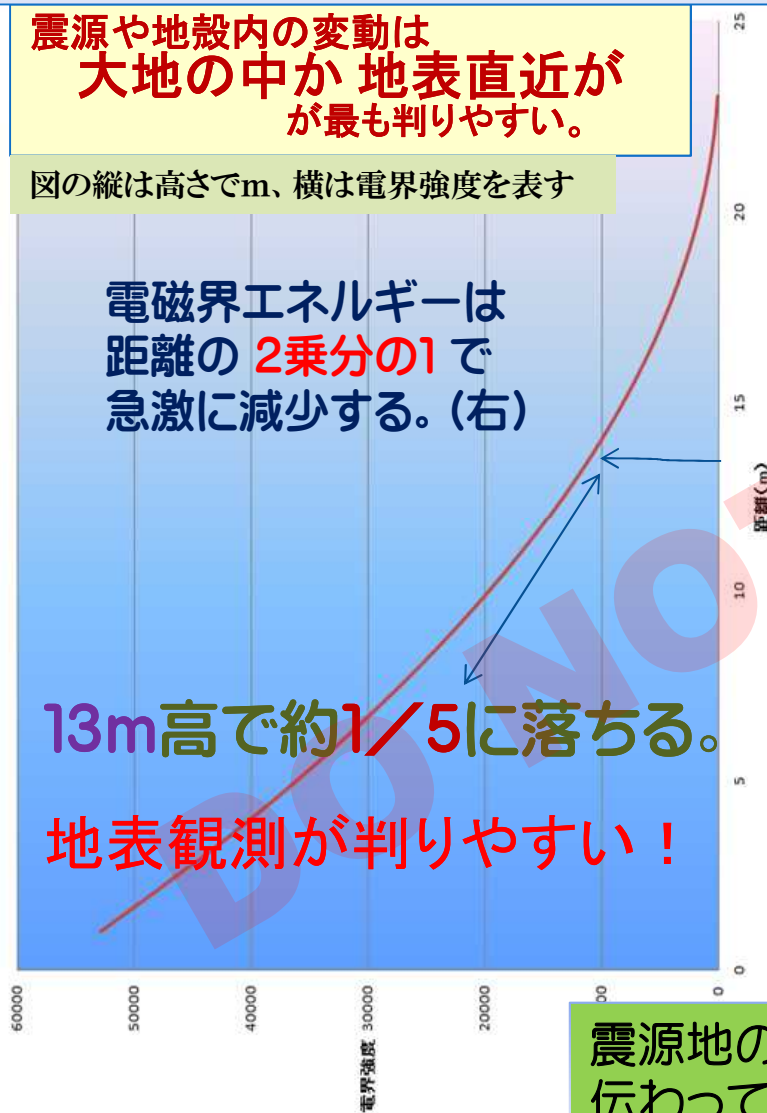
震源や地殻内の変動は
大地の中か 地表直近が
最も判りやすい。

図の縦は高さでm、横は電界強度を表す

電磁界エネルギーは
距離の 2乗分の1で
急激に減少する。(右)

13m高で約1/5に落ちる。

地表観測が判りやすい！



電離層 (D F1 F2層) 約100~300km

スプラディックE層 約80km

電離層 ↑

空気層と電離層

上層の縦は地上高でKm(電離層の図)
下図の縦は空気層でKm(電磁界の図)

空気密度 ↓

地上30km 1/100

空気密度グラフ

地上10k 1/4

地上5k 1/2

地表

雲層

震源地の電磁エネルギーは電磁誘導等で地表まで
伝わって電磁気層や電磁輻射現象の原因となる。

曲折理論と メカニズム

震源の軋轢等で発生した、電磁エネルギーは、地表面に伝わると、貯まって電磁界層を形成したり空中へ放射されたりします。

この(電磁界層は)

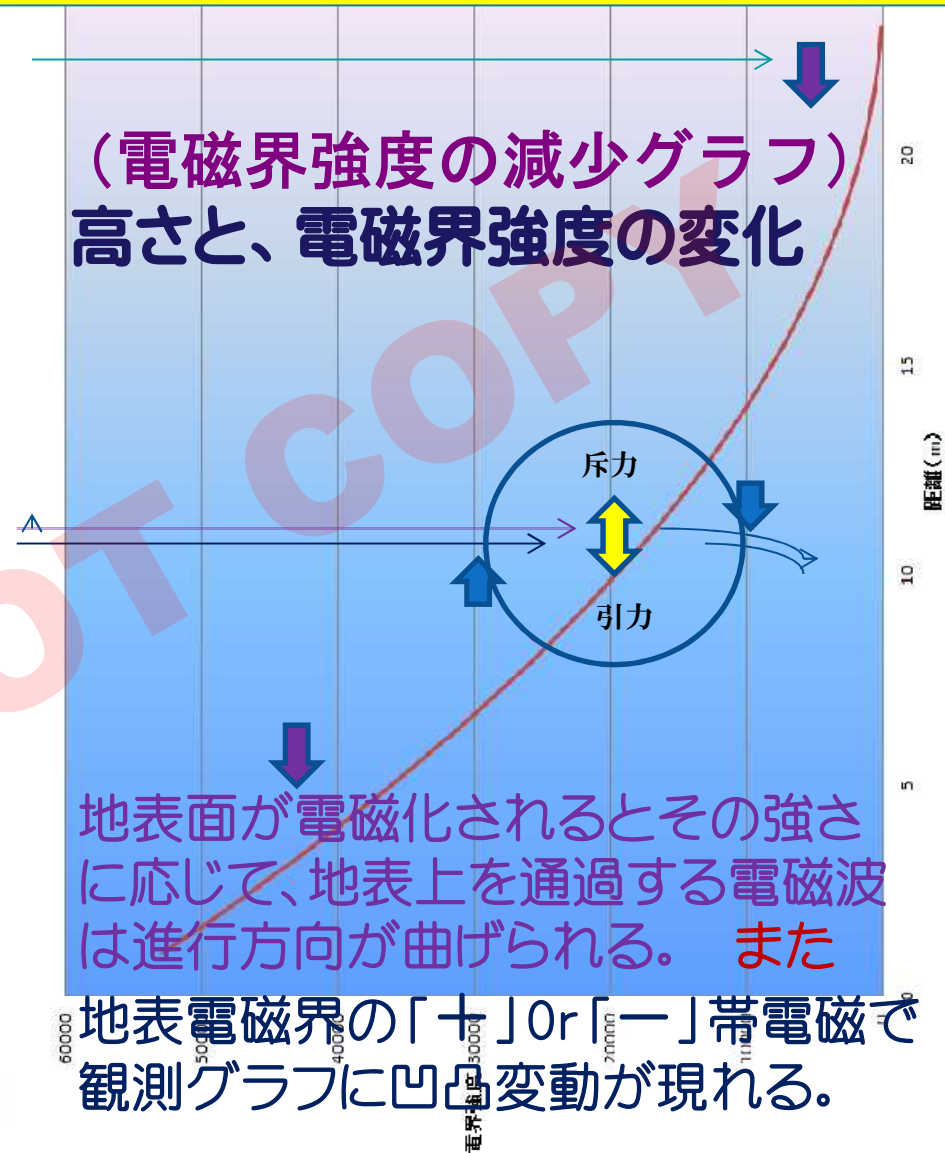
空気コンデンサー模様の界層で、地表では、電磁界の強度が最も強く現れますが、地上高が上がると(約距離の2乗に反比例して)極端に弱くなってしまいます。

これは(連続電磁誘導作用)

電気及び、磁氣的な引力や斥力等の作用によって、影響が最も強い地表では、通過中の電磁波も電磁界変化に応じ、屈折や曲折が起きて、電界強度が変化します。

地上4m=4万が20m=2千で約1/20に落ちる

(電磁界強度の減少グラフ)
高さ、電磁界強度の変化



満潮が穏やかな時期

瀬戸内西側と近隣での地震記録と潮汐の調査結果票(2014. 12. 24日調査)

	地震の発生日時	震央地名	緯度	経度	深さ	M	最大震度	検索対象	潮汐	4～5に
1	2002/4/6 1:57	愛媛県南予	33°	132°	42km	M4.4	4	3	小潮	限定中
2	1997/4/3 6:47	愛媛県南予	33°	132°	52km	M5.0	4	4	大潮満潮	(震度)
3	1985/5/13 19:41	愛媛県南予	32°	132°	39km	M6.0	4	3	中潮引き干	
4	2001/3/24 15:27	安芸灘	34°	132°	46km	M6.7	5.7	5.3	大潮干潮	
5	2014/3/14 2:06	伊予灘	33°	131°	78km	M6.2	5.7	5.3	大潮干潮	
6	1928/9/25 13:58	伊予灘	33°	131°	76km	M5.8	5	3	中潮干潮	
7	2007/6/7 20:50	伊予灘	33°	131°	8km	M4.7	4	4	大潮干潮	
8	2006/9/26 7:03	伊予灘	33°	131°	70km	M5.3	4	4	中潮干潮	
9	1998/5/23 4:49	伊予灘	33°	131°	86km	M5.4	4	4	中潮	
10	1944/6/7 19:15	伊予灘	33°	131°	65km	M6.0	4	4	大潮中	
11	1930/3/31 5:09	伊予灘	33°	132°	46km	M4.6	4	3	大潮干潮	
12	1997/6/25 18:50	山口県中部	34°	131°	8km	M6.6	5.7	3	大潮干潮	
13	1997/3/26 17:31	鹿児島県薩摩	31°	130°	12km	M6.6	5.7	3	大潮干満ち	(参考)
14	1991/10/28 10:09	周防灘	33°	131°	19km	M6.0	4	3	大潮満潮	
15	1979/7/13 17:10	周防灘	33°	132°	70km	M6.0	4	3	大潮干潮	
16	1960/5/11 8:17	周防灘	33°	131°	81km	M5.4	4	3	大潮満潮	
17	1937/2/27 23:41	周防灘	33°	132°	63km	M6.0	4	3	大潮引き中	
18	1995/1/17 5:46	大阪湾	34°	135°	16km	M7.3	7	3	大潮干潮	
19	2006/3/27 11:50	日向灘	32°	132°	35km	M5.5	5.3	5.3	大潮干潮	
20	2002/11/4 13:36	日向灘	32°	131°	35km	M5.9	5.3	5.3	大潮干潮	
21	1996/12/3 7:17	日向灘	31°	131°	38km	M6.7	5.3	4	中潮干潮	
22	1996/10/19 23:44	日向灘	31°	132°	34km	M6.9	5.3	4	小潮	
23	1987/3/18 12:36	日向灘	31°	132°	48km	M6.6	5	4	大潮干潮	
24	1970/7/26 7:41	日向灘	32°	132°	20km	M6.7	5	4	小潮干潮	
25	1968/4/1 9:42	日向灘	32°	132°	22km	M7.5	5	4	中潮～大	
26	1961/2/27 3:10	日向灘	31°	131°	37km	M7.0	5	4	中潮満ち	
27	1941/11/19 1:46	日向灘	32°	132°	33km	M7.2	5	4	大潮干潮	
28	1931/11/2 19:02	日向灘	31°	132°	28km	M7.1	5	4	小潮	
29	1968/8/6 1:17	豊後水道	33°	132°	39km	M6.6	5	5	長潮	
30	2001/4/25 23:40	豊後水道	32°	132°	39km	M5.8	4	4	大潮引き干	
31	1937/2/14 10:05	豊後水道	33°	132°	57km	M5.2	4	4	大潮満潮	
(瀬戸内西側と近隣の地震記録)			19	7	4	30	18	5	7	30
1	大潮,中,小潮か?	大潮19対中	63.33333	23.33333	13.33333		86.6667	13.3333	大潮中潮	84%
2	干潮か満潮か他?	干潮は18対	60	16.66667	23.33333		76.6667	24.3333	干潮満潮	77%

瀬戸内西近郊の調査では、大潮の干潮又は満潮時に77%の確率で地震が起きていました。
大潮の時、干潮時に60%満潮時には17%の確率で地震が発生しており、今後の予測に活用できます。

地震と潮汐の関係(結論)

- {結論1} 潮汐は、毎日2回の緩やかな変化であり、地震のトリガーとして研究されることは少なかったが、電磁気観測データと潮汐の干満変化が同期しており、潮汐の荷重変化は極大で、地殻変動の原因として十分であり、潮汐変化と電磁気観測や地震統計ともほぼ一致することから、**潮汐変化は有効な地震トリガー**と考えられ、**地震予測にも活用すべき事が判った。**
- {結論2} 地震予測は、日単位の予測が限度であったが電磁気Dataに、潮汐時間等を加味できれば、**地震の予測単位は、確率の高い「時間」を予測することが可能**となり、地震予報が始めて、生活に密着した時間域にまで発展することになる。
- {結論3} **電磁観測(パルスの+-)Data**は、潮汐の干満荷重による地殻の変動に関係が深い事が判った。地殻の圧縮や伸張、そして地殻自体の動きの解明に貴重な観測データとなり、地震の**「メカニズム解明」**にも、大きく貢献すると予想している。

電磁波異常のDataと根拠のメカ

- 1 電磁波が地表を伝搬する場合、通過地域の電磁界変化によって影響を受け、また、周辺の瞬間的な電磁変動にも、即応するため受信電界強度がUpDownしたりPulse的に変化してきます。Pulse的な(±)は電磁気の引力や斥力等によるもので、元となる電磁気は逆断層や正断層、即ち地殻の圧縮や伸張とズレ等によって発生したと考えています。
- 2 地震と海洋潮汐や地球潮汐との関係は、電磁的パルスの発生記録から、傾向を検証すると、発生時間は海洋潮汐から約6時間、地球潮汐から約1週間のズレが生じています。
- 3 世界規模で伝搬し地球を周回している短波帯の電磁波は地球規模での大地震や噴火などの前に、その地域から飛来する電磁波のノイズ等が変化している事が判ってきた。そこで地震の予測3原則を研究するための観測を進めている。

潮汐トリガーのMechanism

- FMバンドで電磁波観測の異常Dataと潮汐の干満時間が**ほぼ一致**しました。また、別の電磁観測装置で観測したDataや、FMのバンド全体の記録ビデオでも、ほぼ同じ結果が得られ、**相互に深く関連**していることが判ります。
- 瀬戸内海から太平洋側では、地震が“大きい潮の干潮時に多く発生しています。潮汐と電磁気異常の深い関係を見ると地殻変動を含め**潮汐は地震トリガー**と言えます。
- 地震の**メカニズム**としては、地殻に架かる“海水重量の変移が、地殻内に軋轢や開放等の変動を加え、クラックや電磁気現象等を発生させており、その変移が最大となる大きい潮を中心に、地震が発生しているのです。

全国の観測網(2015-4)

◆ 印は観測中 ✕ 印は計画局

北海道と
東北地方

沖縄諸島

JYAN観測網(アース～V/U局 & FM観測35局 × 4波)

140局のFM電波+「α」で観測中

